

## あ と が き

阿波学会紀要は本号で第57号を数え、通常論文19編と特別寄稿3編を掲載することができた。本号から掲載論文の表題と著者名を和英の二通り表記することにした。

本年度は、阿波学会とその紀要に関して、特筆すべき事があった。阿波学会紀要に掲載の総合学術調査論文が、国の天然記念物指定の根拠資料とされたことである。国の文化審は、阿波学会が総合学術調査で取り組んだ「坂州不整合」の研究成果（「南部黒瀬川帯の坂州不整合と上部三畳系寒谷層」, 2005, 阿波学会紀要第51号, pp.17-23）等に基づき、徳島県那賀町（旧木沢村）の「坂州不整合」を「国指定文化財として指定すべき」と文部科学大臣に答申、2011年2月7日の官報告示（号外 第24号）により、国指定天然記念物「坂州不整合」が誕生した。地学関連の国指定天然記念物では県内3件目で、40年ぶりのことであった。指定理由の詳細は「月刊 文化財」掲載の文化庁鑑修記事（平成23年2月号, pp.16-17）を参照されたい。経過を振り返ると、2004年の阿波学会総合学術調査、2005年の紀要報告に始まり、国指定文化財が誕生するまでには、専門学会誌や国際会議での発表に至る数年間の持続的な取り組みがあり、その間の調査学会と構成員の様々な努力があった。

阿波学会が今日築き上げてきた社会的成果は数多い。「社会的成果を数多く生み出してきた阿波学会の存在とその活動が全国的にもユニークである」とはいったいどういう点にあるのであろうか。またその効果はどのように現れるのであろうか。各班の取り組みは多様であり、各班の構成もまた多様である。参加学会・調査班の構成が専門学会とは異なるという点、まさにこの多様性という特色を自覚し、社会に向けて効果を発揮する方法として、多様な構成員の連携を維持しながら特色ある活動を展開してきたことにある。

阿波学会の活動に関して、何年時を重ねても、これまで普遍的に言えることは、すべては地域調査から始まることであり、成果を地域に還元することである。ただし地域調査のプロセスには、対局としてグローバルな観点が必要であり、グローバルな視野に立つてこそ、地域固有のことがらや全国・世界に共通のことがらを見極めることができる。また地域調査の成果を単に地域の話題に止めるのであれば、専門学会との連携や専門スタッフが活動に参加する意味は薄いであろう。明らかとなった地域固有の事柄を全国・世界に向けて発信してこそ、オンリーワンが検証され輝きを増す。紀要目次に掲載論文の表題と著者名を英語でも表記することにした背景には、編集委員会での上記の論議と会員諸氏の意識があったことを記録に留めておきたい。

総合学術調査の成果は、地元での発表会と阿波学会紀要での論文報告から始まる。これは言うまでもないことだが、今後もこれに止めてはならないであろう。毎年の発表会と紀要での報告を持続的に温め、洗練し、全国的な、さらには国際的な評価にも耐えられる内容・意義付けへと上げるためには、その手法と経験に長けた専門スタッフの存在は有望であり、とくに大学・博物館在籍等の会員諸氏には専門プロとしてのそれが期待されていると言えよう。さらにその成果と意義を広報し、地元での活用に繋げるためには、NPO、教員、行政関係経験者等の会員諸氏の存在は大いに期待されるであろう。全国的なあるいは国際的な成果に上げるまでには、少なくとも数年はかかる。この度の「坂州不整合」に関して言えば、阿波学会の調査・紀要発表から専門学会、ユネスコ国際会議での発表（2006年オークランド；2009年南京）なども経て、この度の答申までに6年、最初の発見（1953年）からは半世紀以上かかっている。

くり返しになるが、もしも阿波学会の活動が発表会と紀要報告だけに留まるとしたら、年次報告、あるいは、単発のイベント行事以上の大きな成果は期待できないところであろう。しかし、これまで多くの参加学会や調査班・会員諸氏が目指してきたのは会則にあるルーチンを超えるものであったことは、成果が枚挙に暇のないことから異論のないところであろう。阿波学会が何年続きいくつの節目を迎えたかは、あくまで結果である。少なくともこれまでの阿波学会の活動は、イベント屋的なものではなく、平常時の意

欲的な活動が阿波学会の原動力であり、持続的な底力を秘めた活動の上にさまざまなイベントもあり得たといえよう。間もなく、阿波学会の学術調査は県内一周の時を迎える。以上をふり返るとき、会員総意の上での更なる将来構想のグランドデザインはまた、節目の記念事業計画よりも優先されるべきことであろう。

既にご存じのように、紀要報告書で公開されている成果の裏付けとなる基礎データの収集は、単に当該年度の総合学術調査期間に留まらず、背景には、参加学会や班員の不断の課題探求がある。阿波学会の地域貢献は、学術団体の調査成果と事務局を担う図書館との協働の上に成り立っていることを読者の皆様にはこの場を借りてご披露したい。引き続き、関係機関・団体ならびに会員諸氏の連携と協力をお願いする次第です。

最後になりましたが、紀要57号発行に支援いただいた関係各位には、紙面をお借りして厚く御礼申し上げますと共に、益々のご発展をお祈りします。(石田 啓 祐)

阿波学会紀要編集委員会

委員長 石田 啓祐

副委員長 中野 真弘 川添 和義

委員 岡山真知子 小川 誠 喜多 順三 近藤 孝造 仙波 光明 高橋 晋一  
根津 寿夫 羽山 久男 堀江 秀茂 萬宮千鶴子 山本 裕史 和田 賢次